森の木魂（こだま）

2023 年 7 月 24 日発行　第 11 号

目次

・巻頭：不安な社会の闇に灯す"希望の松明" …… 1
・第４回森びと総会…… 2
・「いかに生きるか」を考えるシンポジウム報告…… 4
・特別寄稿：足尾銅山閉山 50 年に想う …… 6
・足尾発：足尾・松木に果樹園の誕生 …… 8
・森の仲間たち：中倉山のブナ保護活動に参加して …… 9
・南相馬発：鎮魂復興市民植樹祭報告 …… 10
・秋田発：小坂・ふるさとの森づくり植樹祭に参加して …… 11
・ミノムシ …… 12
・編集後記 …… 12

不安な社会の闇に灯す“希望の松明”

ゴルフボールよりも大きい雹が日本と中国に降りました。車のガラスが粉々に割れ、農家のビニールハウスに大きな穴があき、大きな被害が出たと言います。カナダでの森林火災は、3 月から消えることなく燃え続き、その面積は北海道の面積を上回っています。その森林火災の煙はアメリカへ、そして欧州にも流れて国民の健康被害が心配されています。世界中の人々が異常気象に怯えて生活していると言っても過言ではありません。

しかし、石炭火力発電を止めようとしない日本政府、神宮外苑の再開発を許可した東京都は、いまだに「経済」をただただ優先しているように見えます。このような現状では、私たちは、異常気象の猛威に怯え続けなければなりません。その上、光熱費、食費、医療費等の値上がりの中で、生活苦からの解放は期待できず、ロシアへの経済制裁を強化・継続している日本はそのしっぺ返しで諸物価が下がる期待はもてません。むしろ、NATO プラス支援国とロシアの戦争は世界経済市場の分断（二極化）へと向かっているようで、私たちのこれからは一寸先も見えない闇の中で生活するような不安の日々が続く気がしてなりません。

足尾・松木渓谷入口に建てた遊働楽舎（愛称“みちくさ”）は今年 5 月で 12 年を迎えました。これまで、土・日・祝祭日に“みちくさ”をオープンしてきましたが、今年の夏以降は足尾銅山閉山の半世紀を迎えた足尾松木沢で、四季の草花の咲く時季、新緑や紅葉の時季、昆虫、鳥、動物たちの息吹が感じられる時季に合わせてオープンします。“みちくさ”当番の高齢化もあり、森びとの総力をあげて運営し、オープン日は 1 か月前に森びとホームページでお知らせします。また、「エコ散歩 in 東京」に続いて、「エコ散歩 in 足尾」を開催します。現在、散歩コースのポイントチェック、散策路の整備を行っています。本年は足尾町民や高校生の意見などを聞きながら、散歩を希望する方々の要望に応えられる準備を進めます。

現在、次世代の森びとリーダーの育成に向け「森と生きる人間性」をテーマに、東北と関東にブロックを分け「どんぐりゼミ」を開催しています。生物社会の一員であることを自覚しながら、人間社会のシステムの矛盾を見極める力を養うと同時に、森びとプロジェクトの運営を担うことのできる知識と人間性を養っています。

最近は、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）をはじめとするリアルな情報公開と情報交換が社会の趨勢になってきました。今後の広報活動は、広報誌『森の木魂』を年 4 号（春夏秋冬）発行から年 2 回（7 月、1 月）の発行とし、森づくり等の活動報告はこれまで以上にリアル感のあるホームページに力点を置いて進めていきます。

2025 年は森づくり運動をはじめて 20 年を迎えます。地球温暖化にブレーキをかけていくことに“待ったなし！”は言うまでもなく、これまでに出会った多くの皆さんとの連携し、森に寄り添って生きていく人間性を育み、「脱炭素社会」に私たちの意思を反映させていくために行動していきます。この“希望の松明”を小さな灯にして。

運営委員　大野昭彦

定例報告

第４回森びと総会

6 月 24 日(土)、目黒さつきビル会議室において第 4 回総会を開催し、同会議室とオンラインで行いました。13 時、小黒運営委員の司会で総会が開会。正会員 366 名中 340 名の参加（委任状含）があり、規約に基づき会員の 3 分の 1 以上の出席を確認し、総会の成立が宣言されました。議長には岩田欽五さんを選出し、議事進行が行われました。

主催者の桜井代表からは「東日本大震災で亡くなられた 636 名の南相馬市民の命と彼らが暮らしてきた家を資材として、いのちを守る森の防潮堤をつくりたいと鎮魂復興市民植樹祭を始めました。原発事故で学んだことは第一に“いのちを守ること”でした。多くの市民が避難を余儀なくされ、逆に多くのいのちが失われていった。そういうことを 2 度とさせないという思いで “脱原発都市宣言”や憲法を大切にしてきた。残念なことに、政治の舞台を見ると震災の記憶が徐々に薄らぎ、脱炭素という名の下で、GX 戦略による原発再稼働や新設の動きが大きくなってきている。会員の皆さまから多くの意見をいただきながら、“山と心に木を植える”というスローガンのもと、後継者を育て、仲間を増やし、心を一つにいのちを守る当たり前の活動を続けていきます」と挨拶がありました。

以降、議事次第に基づき 2022 年度活動経過報告、2022 年度収支決算報告、会計監査報告を行い、2023 年度活動方針案、2023 年度予算案が一括提案されました。その後、質疑応答が行われ、オンライン参加者と会場の 15 名から、各地域での活動の報告がありました。東京都神宮外苑再開発の問題については、「憩いの場」や「景観」という視点ではなく、100 年の森に暮らす生き物たちや地面の下で土壌をつくり木々を支える土壌動物など、「灼熱の東京」で温暖化にブレーキをかけている森のエコシステムの視点から、再開発の問題点が議論されました。（発言要旨は後述）

今総会では、高橋佳夫顧問、島野智之生態アドバイザーが退任し、高橋さんは森づくりアドバイザーとして助言をいただきます。総会をつくり出してくれた会員の皆さま、活動を支えて下さったすべての

皆さまに感謝申し上げます。森びとプロジェクトは今年度も、“心に木を植える”「啓発活動」と“山に木を植える”「育樹活動」を両輪に希望の松明を灯していきます。

【運営委員（順不同）】

●アドバイザー

森づくり：高橋佳夫
政　　治：山崎　誠（衆議院議員）
科　　学：倉澤治雄（科学ジャーナリスト）
植　　生：中村幸人（東京農業大学名誉教授）
森　　林：川端省三（法人職員）

●役員

代　　表：桜井勝延（南相馬市議会議員）
副 代 表：清水　卓（法人職員）
運営委員：井上　康（法人職員）
運営委員：大野昭彦
運営委員：小林　敬（会社員）
運営委員：大山博延（会社員）
運営委員：小黒伸也（会社員）

●会計監査員

高橋よし子
笹沼　信男（会社員）

第 4 回総会の発言要旨

総会では 15 名の会員より発言をいただきました。

■各県ファンクラブの活動

コロナ禍で取り組んだ「里親植樹」の木々は食害や落石に負けずにスクスクと育っている。動画を撮影し生長を知らせたい。足尾中倉山のブナ保護活動では「孤高のブナ」の実から育てた幼木を植え、歴史を語り継ぐ「希望のブナ」と名付けた。新聞記事を見た方が「地道な活動に感動した」と森づくり活動に参加、3 名の新たな仲間ができた。（栃木県・加賀さん）

5.27 シンポジウムに参加し地球環境の現状を知り無関心ではいられない。JR で働く若者と生態系を守る意義について議論し、目的を持って足尾の森の観察を行った。現場に立ち「荒廃した森を回復させるのは大変」「企業の利益のために自然まで奪われている」と若者の変化を感じた。賛助会員にもなり、神奈川県ファンクラブの活動につなげたい。（神奈川県・木之下さん）

仙台市荒浜と名取市でのいのちを守る森の防潮堤づくりを取り組み、現在では豊かな森になりつつある。育樹活動には 30 代からシニア世代が参加をし、活動後の「お茶会」では地球温暖化の現実を語り合っている。温室効果ガスを吸収する木を一本でも多く植えたい。（宮城県・林さん）

地元、根本寺の裏山の竹林整備を月に 3 回行っている。散歩する人に「きれいになりましたね。手伝いますから声をかけてください」と言われ、炭焼き用に竹を持って行ってくれた。裏山にはスダジイやタブノキの巨木があり、将来はシラカシなど土地本来の木を植え、散策や憩いの場所にしていきたい。環境整備を通じて地域の人々と気候の話しをし、連帯の輪を広げていく。（茨城県・大津さん）

その他、千葉県・相川さん、応援隊・岩橋さんからも地道な活動に対する発言をいただきました。

神宮外苑再開発による樹木伐採に対する意見

明治神宮外苑再開発での木の伐採に反対し署名活動に参加した。3000 本の木が伐採されようとしている。18 年前から森づくりを行っている私たちは看過できない。生態系豊かな森を破壊してはならない。9 月 3 日の「エコ散歩 in 東京」は神宮外苑で実施してほしい。そして、樹木 3000 本の伐採をしないよう要請して欲しい。（東京都・松井さん）

足尾町民に桜を見て欲しいと、手作りの「花見弁当」を用意して松木沢を案内した。参加した 3 人は桜を見て喜んでくれた。5 月に植えたばかりの果樹園に案内し、ブルーベリーを摘まんでいただいた。「はげ山だった松木沢でこんな体験ができるとは思わなかった。子供の時に出来なかったことを 80 歳になって初めて経験した」と感動を伝えてくれました。森が壊されると人間の暮らしも壊される。松井さんの意見に賛成し、各県ファンクラブでも反対をしていきたい。（栃木県・橋倉さん）

東京都・田城さん、大山さん、神奈川県・山崎さん、滝沢さん、千葉県・長谷さんからも神宮外苑再開発による樹木伐採に反対する意見をいただきました。

会員の意見に対しての回答

神宮外苑を歩いたら、土の上にムクドリが群れていた。何をしているのか見たら、ミミズを探している。モグラが穴を掘り、樹木に必要な水や酸素を循環させる。ヤマモモの木もあり、実がたくさん落ちていた。森は根どうしが菌糸でやり取りをしている。反対の声はたくさん出ているが、自然の営みを分かっているのだろうか。生態系が破壊されようとしている。私たち人間は森に生かされているということを理解し、外苑の森を壊さないように申し入れる必要があるのではないか。（高橋顧問）

東京都は、本来都市にあるべき森が非常に少ない。将来森にできるような緑地を残す事も非常に大事で、少ないものを無くすのはとんでもないこと。今ある外苑の木をさらに本質的な生態系が機能する森に育てていくことが重要なことで、もっともっと森を作っていくべきです。（中村アドバイザー）

運営委員会からのまとめ（清水）

土壌動物研究の第一人者であった故・青木淳一先生が存命なら「森の下にはもう一つの生物社会がある。土の中には人間よりも多くの生き物がいる」と生態系を破壊する行為に怒りを表すでしょう。多くの先人たちが献木し育てられた森は、東京大空襲では都民の命を守りました。命より経済を優先する再開発に対して、会員から出された意見を基に東京都へ神宮外苑再開発に伴う樹木の伐採に反対する意見書提出に向け、運営委員会で議論する。と答弁を行いました。

副代表　清水卓

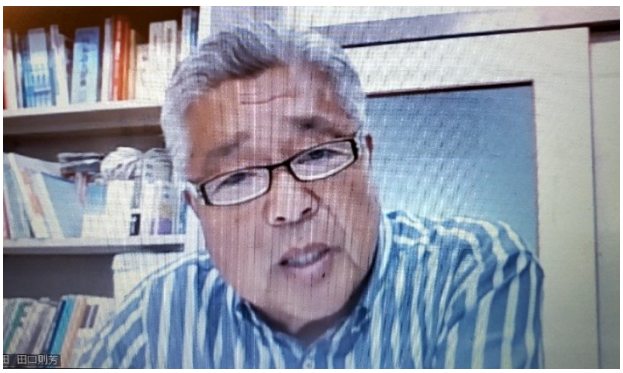
イベント報告

地球環境危機下で「いかに生きるか」を考えるシンポジウム報告

5 月 27 日“地球環境危機下で「いかに生きるか」を考えるシンポジウム”を開催しました。地球環境の危機が叫ばれている現在、私たちは現実を無視することはできず、毎年巨大化する想定外の異常気象の猛威に怯えて生活しています。そのような中において、「脱炭素社会」の実現に向け 4 名のパネラーから「現れている現実」を報告していただきました。

主催者あいさつで桜井代表からは「シンポジウムの題名は、地球に生きる全ての人に課せられた課題です。温暖化や脱炭素社会の問題は世界的にも政治的にも議論されているが、COP27 にも象徴されているように、会議は進めるけれども具体的に温暖化防止が追い付いていないのではないか。地球環境危機を人間が大きく叫ぶ一方で、声を出せない動植物の命が失われている現実もある。今の生活が生きて行く上で大丈夫なのか問われている」と話がされました。

1 人目は秋田県で農業を営む田口則芳さんです。「地産地消、自給率 100％を目指していきたい。秋田では集中豪雨で毎年のように川が氾濫し、田んぼに水が上がり、去年は果樹園が山崩れによって砂利で埋まってしまい、収穫ができないところまで追いやられています。これは私たちの暮らし方に端を発している。より便利に、もっと快適にという社会の仕組みをもう一度ここで深く考えていかないと、子供たちに責任を持った未来を贈ることはできません」。



2 人目は、JR 東日本で働く矢野雅之さんです。「線路内の草刈りは暑い季節に行うので、最高気温は何度だと気にはしますが、今日は暑いなというレベルでした。しかし、先輩から『コンクリートや線路は直接温められ、天気予報の温度と実際の線路付近の温度は全然違うぞ』『線路付近は 40 度を超える時もある』と教わり、驚きました。正直『天気予報の温度』＝『現場の温度』と思っており、気温しか気にせず、命にかかわる温度の中で作業をしているという事に無自覚でした。また、現場の対策としては水分をとる、塩飴を舐める、体調を見て作業する、などを行っていました。ただ、気が付いた人が『じゃあ休憩しようか』と言わない限り作業は行われ、中止にする明確なルールはなく、ルールがないことへの危機感もありませんでした。鉄道魂という言葉がありますが、精神論がまかり通っているのではないでしょうか。そういう意識の中で働かざるを得ない、会社からすればどんな環境でも働いてくれる社員がいてくれて万々歳なのかもしれません。ある職場では、命の危険があるにもかかわらず草刈りをして『いくらコストカットが出来ました』とアピールをしています。命よりもコストカットが優先さ

れており、知らず知らず会社の利益が優先されています。現状をきちんと把握し、鉄道業だけでなく屋外で働くすべての労働者を守る為にも法整備などを要求していきたい」。

3人目は、横須賀石炭火力発電所建設を考える会代表の鈴木陸郎さんです。

「横須賀石炭火力発電所は、1号機が完成し、6月にも営業運転が始められようとしています。2号機が完成されて稼働されると年間726ｔのCO_2が排出されます。この量は石炭1日1万ｔを燃やし、2万ｔのCO_2が排出されることになります。2万ｔのCO_2は、ドライアイスにすると10ｔトラックで毎日2,000台分という膨大な量です。また石炭灰が約1割発生し、一日1,000ｔの石炭灰が出ます。このほかPM2.5をはじめ大気汚染物質が放出され、改善途上にある大気環境が悪化することが懸念されます。気候危機の打開は世界が協調して取り組まなければ解決できない問題です。世界の流れに逆行している石炭火力発電所の運転開始に対して、地元の市議会が何らかの意思表示をするべきであるとして、稼働の中止と再エネ100%を目指す決議、議会としても意思表示を求める請願を提出しました。結果は6対32で否決されましたが、賛同署名をすることで地域に入っていろいろな方と対話する貴重な経験になりました。気候危機は裁判で解決できるとは思わないし、裁判所だけに期待するわけにもいきません」。

最後4人目は、群馬県樹徳高校のOBで名古屋大学4年生の神田涼さんです。

「現在、名古屋大学農学部で炭を使った重金属汚染土壌の浄化についての研究をしています。足尾銅山のような鉱毒の被害を受けた場所をきれいにする研究をしています。実は、高校の頃に部活動で森び

とプロジェクトが行っている足尾の植樹に参加させていただいたことがあり、そこでの経験がきっかけとなりこのような研究をしています。温暖化対策の一つであるカーボンニュートラルを実現するためには、2つの大事なポイントがあります。まず一つ目が、木を切って資源として使うことが大事になってきます。植物が最も二酸化炭素を吸収するのは成長していく時で、苗から木材として収穫するまでの間が一番成長するタイミングなので、木を切って苗を植えていけば効率的にCO_2を吸収することが出来ます。また、この切った木をそのまま放置しておくと生態系の中で分解されてまた二酸化炭素に戻ってしまうので、分解される前に木材として使ったりバイオエタノールの原料にしたりし、この図のサイクルが保たれるようにする必要があります。2つ目のポイントとしては人間の活動によって発生するCO_2の量を減らすということです。化石燃料の使用をゼロにすることももちろん大事です。バイオエタノールなどを化石燃料の代わりに使うことで、元々大気中にあったCO_2が燃料となるため、新たに大気中に出ていくCO_2をゼロにすることが出来ます。しかし、それでも排出するCO_2が多すぎれば森林による吸収量を上回ってしまい、結局大気中のCO_2が増えてしまいます。経済活動の抑制によって温室効果ガス排出量は少なくでき、ある程度の経済の抑制なら可能なのではないでしょうか？僕たち若者世代がどれだけ頑張って新技術を開発して温室効果ガス排出量を減らそうが、その分経済活動が増えてしまってはいたちごっこになってしまいます」。

運営委員　小林敬

特別寄稿

足尾銅山閉山 50 年に想う

1973（昭和 48）年 2 月 28 日、足尾銅山は閉山しました。私たちは、2005 年より足尾の荒廃地で森づくりを続けています。これまで、多くの方々との出会いや協力のもと、ここまで歩んでくることができました。今回は、「足尾銅山閉山 50 年の想う」というテーマで、当時の思い出や未来への思いについて足尾に深いゆかりのある 3 名から寄稿頂きました。

足尾銅山跡から松木村方面

足尾銅山では、1956 年自熔製錬法が完成し、亜硫酸ガスの排出が止まり、緑化事業が本格的に始動しました。1968 年に工事で山に入ったころは、草木どころか虫も住まない不毛な風景でした。強い日差しや風、雨を防ぐものはなく雷に撃たれる事故等自然の猛威にさらされた厳しい作業でした。1990 年代に民間団体のボランティア植樹も始まりましたが、限られた地域で、大部分の山々は緑に覆われてきたものの、樹種はヤシャブシ、ニセアカシア、ヤマハンノキなど数種類にとどまり、土壌はごく薄く低木が主体です。多くの人々の力によって回復の兆しはみられますが、壊滅的な被害を受けた山々が本来の森林機能を回復するには世代を越えた緑を育む活動が必須です。土壌を生産する肥料木を主体とした多様な樹種が生育する林に代えていかねばならないと思います。足尾の山は次のステージに取り組む段階にあると思います。

しかし、奥地等の大部分では、地表面を植生で覆い土砂の流出を防ぐことが優先となり、地区ごとによりきめの細やかな対策が期待されます。それは効率よく森林機能を回復させる近道になると思います。多くの人々の手によって回復させた労力と時間を無駄にしないためにも、これからも皆さんの知恵と作業の参加を期待し一日も早く足尾の森が再生する事を願っています。

足尾まるごと井戸端会議　山田功

私は足尾で生まれ足尾で育ち、今年 87 歳になります。朝の散歩が毎日の日課で、桐生や今市に出かける以外は日々のんびりと過ごしています。

現役時代は、古河機械金属株式会社に約 30 年お世話になり、分析課で定年を迎えました。古河と言えば鉱毒事件が有名ですが、足尾でも山の草木が枯れる大煙害がありました。我が家でもトマトやキュウリを作っていましたが、亜硫酸ガスの被害に遭い作物は諦めざるを得ませんでした。製錬所に近い私の家の周りの山々は、草木がなく文字通りのハゲ山になってしまい、小学生になった息子が描いた「茶色の山」を見て、ショックを受けたものでした。

今年の 5 月、森びとの方々に誘っていただいて、松木で「お花見」をする機会がありました。久し振りに見た松木の風景は、想像以上に素晴らしいものでした。あの煙害のあった松木に、桜が咲く日が来るとは想像もしていなかっただけに、大変感銘を受けました。この素晴らしい景色を、もっと多くの人に見て欲しいと願いました。

一度失った自然を取り戻すのは大変なことです。このかけがいのない自然を、子供や孫の世代に残すことが、私達の務めであると改めて思いました。
清々しい気持ちと「茶色の山」を思い出せてくれたことを絶対忘れません。森びとの皆さん！健康に注意して素晴らしい「紅葉の山」を見せていただきたいです。

足尾町民　高橋元一

私が初めて足尾を訪れたのは、銅山閉山約 5 年後の昭和 52 年頃、大学での砂防実習でした。本格的な緑化事業から約 20 年経過したとは言え、一帯はまだ岩と土石だらけの禿山で、小面積ながら植栽されたクロマツ若木の緑を鮮明に覚えています。

それから約 25 年後の平成 16 年、日光森林管理署に勤務する機会を得ました。長きに亘り足尾の荒廃地復旧・緑化に挑んだ先達の汗と苦労の結晶として、砂防、治山堰堤群による洪水防止とヘリも使用した斜面緑化などにより、三川ダムに注ぐ各河川の水質も改善し、さらには森びとを含む森づくりボランティアの聖地ともいえるフィールドに変貌しました。

さらに 20 年程経過した現在、足尾は動植物の多様性を高めながら自然度の高いものに変貌しつつありますが、未だ積極的な人為の延長線上にあり、足尾本来の姿の復元にはまだ長い道のりが必要です。

ここに至るまで約 3/4 世紀。破壊の代償の大きさに慄くばかりですが、一方で、継続的な緑化や自然再生力を引き出す取組みを継続していけば、人と共生する里山や、足尾の本来の姿である緑豊かな自然環境を取り戻すことは可能と信じています。世代を超える壮大なプロジェクトの次の展開に期待します。

森びとプロジェクト森林アドバイザー　川端省三

足尾銅山関連年表

1877 年：古河市兵衛が足尾銅山の経営
1884 年：足尾銅山の銅生産量が日本一
1901 年：田中正造直訴
1902 年：松木村廃村
1906 年：谷中村廃村
1912 年：足尾銅山の坑道が全面的に電化
1921 年：足尾銅山で初の自走式ディーゼル機関車が導入
1937 年：足尾銅山で初の電気式掘削機が導入
1945 年：第二次世界大戦終戦後、GHQ により接収
1950 年代：復興期を迎え、再び日本一の銅山に成長
1960 年代：国内外の銅価格低迷により、経営が悪化
1973 年：足尾銅山閉山

足尾発！

足尾・松木に果樹園の誕生！

今年、足尾銅山が閉山して 50 年を迎えました。1902 年に廃村した旧松木村では、江戸時代後期には 37 戸 170 人もの村民が支えあって生活していたようです。村民の子孫から、村には、池がありトキが舞い降りていた自然豊かな環境であったと話を聞き、木々に囲まれ山の幸や川の幸にも恵まれ、桑を育てて繭から生糸を得て現金収入にしていたのではないかと思います。また、お茶やゆずを育てて、秋には山ブドウを美味しく食していたのでしょう。村民の皆さんは、森に寄り添って心豊かな生活していたと思います。

しかし、足尾銅山の稼働により、大量の木材が必要となり、度重なる樹木の伐採が行われました。精錬所から放出された亜硫酸ガスによる煙害などによって、森は衰退していき、木々を失った山から土壌が流出し、硬い岩盤の剥き出しになった無残な姿になってしまいました。その影響で農作物の不作、蚕の餌となる桑の葉、桑の枯死が村を襲ったのです。森は一度失われると、回復までには多くの時間が必要とされます。この松木村のあった場所で活動をしている私たちは、自然と向き合ってきた松木村の歴史を学びつつ、村民の思いを馳せる場として、森を蘇らせる努力をしています。

ブドウ（左下）ミカン（右上）サルにとられないようにしないと！

「山と心に木を植えて」18 年目の今年は、森びと広場の下の敷地に、お茶とゆず、みかん、ブドウ、ブルーベリー、そしてラズベリーを初めて植樹しました。2025 年は森づくりを始めて 20 年になります。豊かな森に囲まれていた松木村を思い浮かべ松木沢を訪れるみなさんと森の恵みをいただく“楽しみ”を作ろうと考えたからです。

村民の皆さんの心に近づき、人間は森に生かされていることの喜びを足尾の住民の皆さんと共に喜び合いたいと思います。寒冷地で砂地と、条件としては大変厳しい土地ですが自然の厳しさに耐えうるように世話をしていきます。「エコ散歩 in 足尾」では、植樹地の杜の散策後に、フルーツとお茶で心とのどを潤していただければうれしく思います。

森に寄り添ってしか生きることが出来ない人間であることを実感できる足尾・松木沢にお越し下さることをお待ちしています。

足尾森づくりスタッフ　済賀正文

森の仲間たち

中倉山のブナ保護活動に参加して

4 月 29 日に開催した中倉山のブナを保護する活動には総勢 41 名の皆さんに協力いただきました。足尾銅山の煙害に耐え、現在は地球温暖化による豪雨や強風に耐えるブナを守るために、私たちは 2013 年から保護活動を行っています。今年は「孤高のブナ」の DNA を持つ幼木「希望のブナ」を笹に覆われた南斜面に植樹しました。参加された那須拓陽高校の生徒と先生から感想をいただきましたので、ここに紹介します。

私は、苦労して足尾の中倉山に登り、樹齢 120 年以上といわれる孤高のブナを守りたいという参加者の思いを感じることができました。今回の作業は、ブナの周りの土砂が流出するのを防止するため、腐葉土を植生袋に詰めて斜面に張り付けることでした。植生袋には、那須拓陽高校で作った堆肥を混ぜていただきました。堆肥の栄養がブナや根を守る草を育てると考えると、誇らしく思いました。その後、少し離れたところに「孤高のブナ」の実生から育てた「希望のブナ」を植樹しました。この場所で何百年も生きて、訪れた人にも希望を与えてほしいです。これからもこのような活動に参加したいと思います。ありがとうございました。

農業経営科 2 年　磯大耶

私は今までボランティア活動に参加したことがありませんでした。当日は朝早く出発し、不安を抱えながら登山を開始しました。中倉山は標高 1530m と聞いていたので登れるかどうか心配でしたが、途中で多くの人から声をかけていただき上りきることができました。頂上にはすでにたくさんの人がいて、全員で土留めの作業を行いました。私たちの作業でブナが元気に生きてくれるよう、願いを込めて行いました。帰りには、農業経営科の先輩方が植樹したエノキを見て、「みちくさ」でいろいろな話を聞くことができました。甘酒もおいしかったです。頂上の景色やボランティアの方々の思いなど、忘れられない日になりました。

農業経営科 2 年　中西健太

今回「森びとプロジェクト」の活動に参加させていただき、多くのことを学ぶことができました。本格的な山登りは初めてで、体力の限界を迎えそうになりましたが、周りの方々に声をかけていただくことで励まされ、無事「孤高のブナ」に会うことができました。足尾銅山で起きた鉱毒事件のことは知っていましたが、実際に山の稜線にぽつんと立っているブナを見ると、知っていただけで理解することはできていなかったのだと認識しました。たくさんの人が集まり知恵を出し合って、足尾の山を再生しブナを守る、そんな人たちのあり方に憧れ尊敬します。私もその思いを引継ぎ、後世に繋いでいきたいと思います。そしていつか、中倉山に立つ親子のブナに会いに行きたいです。

農業経営科 2 年　本田凪

新型コロナウィルスによる学校生活の制限で、子供達には様々な影響が見られます。特に学校外でのコミュニケーション能力については、著しく低下しているような印象があります。人格を形成する大切な時期に長いマスク生活では、当然かもしれません。活動制限が緩和された 4 月に、久しぶりに足尾を訪れました。旧松木村は、何度来ても不思議な郷愁に駆られます。今回の「孤高のブナ」の保護活動、「希望のブナ」の植樹は、生徒たちにとって忘れられない体験になりました。植樹した木が、あの場所で何百年も生きていくことを思うと、自分たちがいなくなった後の遠い未来に思いを馳せることができます。実際に見て、触って、感じることは、教室の中ではできません。これからも「森びとプロジェクト」の活動に参加させていただきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

教諭　池田修一

南相馬発！

第 11 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭報告

2023 年 6 月 11 日、震災から 13 回忌となる第 11 回南相馬市鎮魂復興市民植樹祭が開催されました。あいにくの雨模様でしたが、苗木にとっては絶好の恵みの雨となり、うれしいつぶやきが聞こえるようでした。植林ボランティアの皆さんは各ブロックのリーダーの下、21 種類 20,000 本の苗木に新しいいのちを吹き込んでくれました。翌日には応援隊として、森びとゼミ受講者を「いのちを守る森の防潮堤」に案内し、木々の生長だけではなく、土壌の変化や森に生きる鳥や動物など命を育む森の防潮堤を観察してもらいました。

これまでの 3 年間の植樹祭は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、「市民限定の規模縮小」を余儀なくされ、さらには植樹祭実行委員会主催の年 4 回の除草作業活動も 3 年間中止されました。植樹された苗木は常に草との競争となり、私たちは除草作業が計画的にできなかったむなしさと悔しさを感じ、対策と行動の必要性を気づかされました。

今回の植樹祭には、全国の植林ボランティアのみなさんをはじめこれまで以上に家族連れの参加者も多く、次世代を担う子どもたちの楽しく植樹している姿にホッとした一面もありました。しかし、鎮魂復興市民植樹祭も 11 回目を迎えると、鎮魂復興からかけ離れつつあります。具体的には、市民参加型から企業や団体等の動員による参加になってはいないかと危惧します。本来の「鎮魂復興」という趣旨・目的に則り、企業・団体のアピールの植樹祭にならないように今後の植樹祭はどうあるべきかをもう一度振り返り、植樹祭実行委員会内で議論をしていきたいと思っています。

私たちは、2015 年 2 月に市民参加の南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊を結成し、市の復興事業計画に基づき「鎮魂復興」のための「いのちを守る森の防潮堤づくり」を応援してきました。第 1 回植樹祭（2013 年 10 月 6 日）に参加する以前まで、育苗・育樹活動と植樹作業の経験がないため、当時の NPO 法人森びとプロジェクト委員会から「木を植えることの大切さ」「なぜ宮脇方式による密植・混植なのか」「森びとプロジェクトの合言葉である山と心に木を植えることとはどういうことなのか」「次世代を担う学生・子どもたちとのコミュニケーションづくり」「地球温暖化にストップをかけるために多くの市民との関わりの大切さ」等、数えきれない経験や成功例、失敗談、足尾で学んだ多くの教訓を伝えていただき、内部でその共有化を図ってきました。

今後応援隊はスタッフの高齢化に伴い、人材育成と啓発活動を中心とした無理のない活動を心掛けてケガの防止に努めていきます。これまでの市役所と協働での育樹作業の継続と意見交換を図り、植樹祭実行委員会に意見を反映させていくとともに、応援隊スタッフによる植樹祭会場の「森の案内」や次世代を担う学生に環境学習・植樹ゼミを構想し働きかけていきます。あくまでも、南相馬市の進める「いのちを守る森の防潮堤づくり」の主役は市民であり、市民の心にも木を植えていかなければと思います。息の長い活動となりますが、今後もこれまで以上のご支援とご協力をよろしくお願い致します。

森びと福島県ファンクラブ　東城敏男

秋田発

小坂・ふるさとの森づくり植樹祭に参加して

植樹祭の様子

6 月 23 日、第 13 回 DOWA の森「小坂・ふるさとの森づくり植樹祭」（秋田県鹿角郡小坂町）に秋田県ファンクラブ 7 名で参加しました。小雨が降っており、植樹をするには最高のコンデションでした。

DOWA ホールディングス（株）の植樹祭は、2006 年から事業地内の緑化事業として始まり、今回は 4 年ぶり 13 回目の開催でした。植樹地は栃木県・足尾と同様にかつて鉱山開発によって森を失った場所であり、現在では豊かな森を取り戻すために生物多様性の保全に力を入れている場となっています。森づくりを指導する（公財）地球環境戦略環境機関国際生態学センターの主幹研究員・目黒伸一さんから、「一会社の鉱業会社が 20 万本以上の植樹をしていて、それがスクスク育っている状況は日本に誇れる活動である」と挨拶がされました。

この 3 年間はコロナが蔓延して思うような活動ができず、秋田県ファンクラブとして久しぶりの参加となりました。地元の小坂小学校の 5 年生の生徒や市民クラブの皆さん、鉱山関連会社 OB の方々、DOWA グループの従業員、中には前回植樹して、どのように育っているかを確認するために今回も参加したという 80 歳のご婦人も元気に植樹していました。DOWA グループには下準備作業、整地、ロープ貼り、飲み物、移植ごて、軍手、タオルを用意していただき、180 名の参加で 16 種類 1,000 本の植樹を無事に怪我なくスムーズに行うことができました。

このボランティア活動は地域を支え、豊かな森を作り、職場の環境も守っています。きっと参加した皆さんの良い思い出にもなったことでしょう。小坂小学校の生徒の皆さんからは、「来年は最上級生になるので低学年の生徒を連れて参加したい」との心強い言葉がありました。

私たちの活動は小さなものですが、何十年か後には立派な木々たちが様々な色をつけて、皆さんの心を癒してくれると思います。たくさんの人が更に集まってくれるように植樹活動を続けていきます。

また、この DOWA の森は宮脇方式による植樹をされており、この 12 年の間に木々はスクスク成長して、4 メートルを超える木々もあるそうです。生育の困難な地域での育樹活動はどのように行われているのか、地域との関わり方等、話を伺う機会を作るためにアプローチをし、活動のウイングを広げていきたいと思います。

森びと秋田県ファンクラブ　船木藤典

ミノムシ

今年３月に亡くなられた音楽家の坂本龍一さんが、明治神宮外苑地区の再開発による樹木の大量伐採の見直しを求めて、小池東京都知事に手紙を送ったニュースが取り上げられました。並行して SNS などを中心に、21 万を超えるオンライン署名行動や人間の鎖での抗議活動も行われています。神宮外苑の他にも、都内では日比谷公園、葛西臨海公園でも 1,000 本以上の樹木の伐採がされようとしており、森に対する畏敬の念が軽んじられています。樹木はひとたび伐採をしてしまえば、元の姿に戻すことはできず、たとえ移植をしたとしても、これまで作られていた生態系が破壊され、そこを住処としていた動物や昆虫に大きな影響を与えます。今月中旬には住民説明会が行われますが、対象は 380 メートル圏内の住民のみという制限があり、スマホかパソコンでの申し込みのみ、個人情報の提出など、参加申し込みを躊躇するほどハードルが高く設定され、住民への説明を行った、というアリバイづくりのためではないかと疑われています。何より一部利権の恩恵に預かるものの意志や企業ファーストが貫かれ、初めから住民や市民、そして生き物の声に耳を傾ける姿勢は一切感じられません。森びとでは、第４回総会で会員からの意見として出された神宮外苑再開発による樹木伐採反対の意見書を東京都へ提出します。この再開発による樹木の伐採は、世界の CO2 削減の動きに逆行する動きであり、様々な方々と連携をし、問題点を積極的に発信していきます。運営委員　小林敬

編集後記

生成ＡＩを使って「森びと」「山と心に木を植える」「自然」というキーワードで画像を作ってみました。ものの数秒でそれらしいものが何パターンかで出てきます。気に入らなければさらに指示を出せば良いのだから超らくちん(著作権とか注意が必要そうではあります)。あぁ、これならこの編集後記も書いてもらおうかしら。いやいやこの木魂自体も作ってもらったら？文章の校正なんてお手の物ですし、ある程度の下書きならすぐに書いてくれそうです。編集も、もう私たちがやらなくたってよさげな気がしてきました。おぉすごい！

世の中ＡＩが書いたものばっかりになったらそれはそれで傍から見ると面白いですけど、結局のところ「つくったものを何にどう使うのか」は人の手にかかるわけで、文章の質なんてものはよりその人のセンスにかかってくるのかもしれませんね。

ロボットが出てきたときはこれで肉体労働はなくなり格差も減ると期待されました。ところが今でも肉体労働はエッセンシャルですし、ロボットを使えるのは一部の資本家だけだったりします。同じことがＡＩで起きなきゃいいんですけど。あぁ余計なことを書いていたら字数がそろそろオーバーですよ。「これ、もう少しうまくまとめてくれない？」「これ以上は有料です。」あぁそうですか。「ＡＩが作ってくれてもうれしかない」（ものもありますよと）

運営委員　小黒伸也

森の木魂（こだま）第 11 号（2023 年 7 月 24 日発行）
発行：森びとプロジェクト
発行人：桜井勝延
編集人：森びとプロジェクト編集委員
第一版

〒141-0031
東京都品川区西五反田 3-2-13 3F 303 号室
TEL&FAX 03-6417-3750
http://www.moribito.info/
Email info@moribito.info